

当報告の内容は、報告者の著作物です。
Copyrighted materials of the authors.

「モンゴル諸語の言語変容：内的要因と外的要因」

(2019年度第2回(通算第4回)研究会)

Synchrony and Diachrony of Mongolic Languages: Internal and External Factors (The 4th meeting)

日時：2020年2月1日(土)

Date: 1st Feb. 2020

場所：AA 研小会議室 (302)

Venue: Room 302, ILCAA

Language: Japanese, English

通算第4回目の研究会となる今回は、青海・甘粛言語連合(Qinghai-Gansu Sprachbund)において広くみられる、話者の認識や知識を基盤として使い分けられる述語表現現象に焦点を当て、そのような使い分けをもつ言語を対象に研究する4名の研究者からご報告いただいた。当該現象は従来 Epistemicity, Evidentiality, Subjective/Objective perspective, Egophoricity といった術語で定義・説明が試みられてきたが、その実態については(通言語的に)解明されたとはいえない。モンゴル諸語の中ではこの地域に分布する言語に特有の現象だとされている。今回の研究会では二つのモンゴル諸語と二つの非モンゴル諸語を対象に、それぞれの言語において当該現象がどのように説明できるのかを対照しあつた。

1. 佐藤暢治(AA 研共同研究員, 広島大学)

「保安語積石山方言における事態の捉え方」

発表者は、保安語積石山方言の述部における2系列の形式の使い分け、「I形式」と「O形式」について、先行研究の記述を概説し、その問題点を指摘したうえで、a)話し手(疑問文では聞き手)の事態と制御、b)第三者の事態における話し手の関与、という二つに分けて両形式の使い分けの記述を試みた。話し手に関する事態(疑問文においては聞き手に関する事態)について言及する際には通常I形式が、第三者に関する事態について言及する際にはO形式が通常用いられるが、その一方で話し手の事態に関してO形式で、第三者の事態に関してI形式で言及することがある。これについて発表者は以下のように分析結果をまとめた。

a) に関しては非意図、能力の欠如、予想外、他者の管理下というような、話し手の事態であっても、その事態を話し手が制御できない場合で、さらに話し手にとって何かしら負の影響を被るとみなされる場合にO形式が用いられる。

b) に関しては事態に話し手が関与している、つまり自体全体を話し手の個人的な体験として直接把握していたり、過去の事態では何かを根拠にした疑いのない事態である場合に、未来の事態については事態を話し手の管理下におくか、思い込みや決めつけによる推量となされる場合にI形式が用いられる。

2. 塩谷茂樹（大阪大学）

「民和土族語における主観・客観形式について」

発表者は民和土族語を対象に、とくに当該言語を教授する際に述語形式の使い分けをどのように説明するのが合理的かという観点に基づいて、母語話者からの聞き取り調査をもとに当該現象を整理した。該当する形式は従来「主観形式」「客観形式」と呼ばれてきた。[報告者注：佐藤発表のI形式が「主観形式」、O形式が「客観形式」にそれぞれ対応する] そのうえで、合理的な説明として以下のとおり三つの規則を立てることが提案された。

規則1：

- 1) 話し手が自分のことを述べる場合→通常は「主観」形式
- 2) 話し手が自分以外の人や物を述べる場合→通常は「客観」形式
- 3) 話し手が自分や聞き手以外の第三者に「主観」形式を用いて述べる場合→「推定・想像」の意

規則2：「疑問文」の場合、判断主体が、話し手から聞き手にシフトする。

- 1) 話し手が聞き手のことを尋ねる場合→通常は「主観」形式
- 2) 話し手が聞き手以外の人や物を尋ねる場合→通常は「客観」形式
- 3) 話し手が自分や聞き手以外の第三者に「主観」形式を用いて尋ねる場合→「推定・想像」の意

規則3：「非制御動詞(non-control verbs)。(自分の意志で制御できないような感情・感覚動詞、たとえば ayi (恐れる)、bietu (痛む)、luosi (空腹になる)、sanna (恋しく思う) 等の動詞) を用いる場合

- 1) 話し手が自分のことを述べる場合→専ら「客観」形式
- 2) 話し手が自分以外の人や物を述べる場合→「客観」形式
- 3) 話し手が自分以外の聞き手や第三者に「主観」形式を用いて述べる場合→「推定・想像」の意

規則3 注意事項1：未来(～する)及び現在・継続習慣(今/いつも)～している)の、いわゆる「非過去」(nonpast)の場合にのみ適用される。過去(～した)や過去からの継続習慣((過去からずっとまだ)～している)には適用されない(この場合は、規則1が適用される)

規則3 注意事項2：非制御動詞で、未来(～する)及び現在・継続習慣((今/いつも)～している)の、いわゆる「非過去」(nonpast)の場合、疑問文であっても、判断主体が聞き手にシフトせず、規則2は適用されない

3. 海老原志穂（AA 研共同研究員、AA 研フェロー）

「チベット諸語における証拠性研究の最近の動向」

アムド・チベット語を対象に研究を続ける発表者より、チベット諸語における証拠性研究の動向についての情報提供がなされた。アムド・チベット語の証拠性は、話し手が情報をもともと知っていたのか(定着知)、新たに知ったのか(観察知)、間接的に推量したのかという3系列に整理され、さらに観察知は現場観察・結果観察・状態観察に下位区分される。さらに証拠性のほか、話し手が関与したか否か(ウチの事態とソトの事態)による区別もかかわってくる。この証拠性とウチ/ソトを同じ範疇として記述する立場と、別範疇として記述する立場があることが紹介されたほか、Evidential/Epistemic システムが a)

evidential source, b) evidential access, c) epistemic evaluation, d) stance という四つのタイプと 1) sensory, 2) inferential, 3) authoritative, 4) hearsay and reported speech, 5) epistemic という五つのカテゴリーからなること、それらを表すために複数の助動詞が連なることがチベット諸語の共通特徴として観察されるという Tournadre (2019) の研究についても紹介された。

4. Erika Sandman (AA 研共同研究員、ヘルシンキ大学)

“Egophoric marking in interaction in Wutun”

青海省で話される五屯語を専門に研究する発表者から、五屯語の概況とともに当該言語の Egophoricity に関する標識の使い分けについて報告された。エリシテーション調査の結果、使い分けは発話であらわされる事態に対する話し手のかかわり (personal involvement) の度合いと、その事態に対する評価 (evaluation)、とくに話し手にとってどの程度好ましいのかといった点が関与しているという仮説をたて、自然談話から得られた使用例の説明を試み、仮説の妥当性を検証した。

4 言語ともそれぞれその使い分け、形式の豊富さ等に差異はあるが、共通点として挙げられるのは話し手が事態をどのようにとらえているかということが大きく使い分けに関与するという点である。この話し手の関与については、他のモンゴル諸語においては体系化されていないとはいえ、異なった形で表現の使い分け、形式の人称による制限等が見られる。青海・甘粛言語連合における当該形式の体系化がどのように発生したのかという疑問にアプローチするうえでも、有意義な研究会となった。

なお、これまで同様発表資料については共同研究員のあいだで下記ウェブサイトにて共有することとした。(文責：山越康裕、敬称略)

<https://sites.google.com/view/ilcaa-mongolic/>